

琉球大学学術リポジトリ

[研究ノート]離島におけるフィリピン人結婚移民の定住と職業生活：
1990年代に来日した女性たちの介護職への従事

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄移民研究センター 公開日: 2020-02-18 キーワード (Ja): 離島, 結婚移民, フィリピン人, 介護 キーワード (En): Remote islands, Marriage migrants, Filipinos, Caregivers 作成者: 高畑, 幸, Takahata, Sachi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002012198

離島におけるフィリピン人結婚移民の定住と職業生活 ——1990年代に来日した女性たちの介護職への従事——

高畑 幸

- I. 問題設定
- II. 介護職に就く外国人
- III. 徳之島で暮らすフィリピン人
- IV. 徳之島におけるフィリピン人の介護職への従事
- V. むすび

キーワード：離島，結婚移民，フィリピン人，介護

I. 問題設定

本稿の目的は、徳之島在住のフィリピン人結婚移民の介護職への従事に関する考察を通して、離島および都市部における結婚移住者の定住のありかたと職業選択を再考することにある。具体的には、①徳之島におけるフィリピン人の人口動態的特徴は何か、②彼女らはなぜ介護職に従事するのか、③そこから見えてくる「離島の結婚移民」の特徴は何か、を明らかにしたい。

はじめに先行研究を整理しておく。田島（2000）は徳之島（特に天城町）のフィリピン人結婚移民に関する数少ない先行研究である。「離島の国際化」を考察することを目的に書かれた同論文は、1990年代前半には鹿児島県で最も多い外国人がフィリピン人となったこと、さらには1980年代は鹿児島市でフィリピン人が最も多かったが1990年代は大島郡（徳之島にある3町を含む）で最多となったことを指摘している。田島は、結婚移民とは別の文脈で1990年に始まった天城町とフィリピン・ネグロス島のシライ市との姉妹都市交流にも触れている。それは当時のふるさと創成資金を活用し「離島の閉鎖性を克服する」ことを目的に始まった、いわば「さとうきび交流」であり、仲介者は南西糖業の親会社でありネグロス島で大規模にエビ養殖をしていた大洋漁業であった。その後、シライ市から研修生の受け入れが始まり1994年からはフィリピン大使らを招いての「フィリピン祭り」まで開催されるが、研修生に対する入国管理の厳格化や予算不足等が原因となり「行政改革の一環として」1999年には祭りが中止となる。

このような天城町の姉妹都市交流を田島は「国際結婚女性の心を癒す」と表現している。田島による聞き取り調査および町から提供された資料によると、1990年代の天城町におけるフィリピン人妻はほぼすべてが元興行労働者であり、妻が20代で夫が30～50

代という組み合わせが多く、島の嫁不足を補っていた。先進国の日本と当時は発展途上国だったフィリピンという従属性と、日本の中での周縁部である徳之島の男性と首都マニラ出身が多い女性たちという「どちらかといえば対等な関係」が併存していると田島は指摘する。

離島のフィリピン人結婚移民については、高畑（2016）が「結婚移民が定住すると、夫のきょうだいや友人に頼まれて、結婚移民の妹や従妹を紹介して同じ場所に嫁がせることで連鎖移動が起こる」ことを指摘した。また、介護労働については、2008年に在日フィリピン人でホームヘルパー2級資格取得者190人を対象に行ったアンケート調査から、フィリピン人結婚移民女性の介護職への従事は、その動機が「やりがい」や「社会的評価を求めて」であることを高畑（2018, 2019）が指摘している。本稿では、具体的には①フィリピン人結婚移民の来住経緯や連鎖移動等の特徴が先島と同様に徳之島でも見られるか、②介護職への従事に離島と離島以外の場所（本土あるいは内地と呼ばれる）では違いがあるのか、③田島が指摘した「閉鎖性の克服」が2016年から2018年の徳之島においていかに見られるかを明らかにしたい。

II. 介護職に就く外国人

2000年に介護保険が導入されて以来、日本では介護サービスの商品化が進んだ。同時に日本は少子高齢化が加速し、介護労働者の不足は深刻さを増すばかりである。それに伴い、さまざまな在留資格をもって介護職に就く外国人が増えている。

表1は、2000年から2019年に至る20年間で介護職に従事してきた外国人の来日経緯と在留資格を示したものである。いち早く介護職に参入したのが、在日コリアン、日本人の配偶者や日系人など、すでに日本で定住していた人びとであった。2008年から経済連携協定によりインドネシア、フィリピン、ベトナムから介護福祉士候補者が来日するが、この目的は人材交流あるいは技術移転にあり、労働力不足の解消ではなかった。その後に来日する新日系フィリピン人も在留資格は定住等で、いわば2000年代の「外国人介護労働者」は「(少なくとも表向きは)介護を主目的として来日したわけではない人びと」であった。

2012年から風向きが変わり、2008年に来日した経済連携協定による介護福祉士候補者が3年の実務経験を経て介護福祉士試験に合格すると、彼らは晴れて「介護の専門人材」として定住および家族呼び寄せが可能となった。その後も日本では介護人材の不足は続き、2017年には介護の専門学校を卒業し介護福祉士となった外国人が「介護」の在留資格を得られるようになるとともに、介護が技能実習の対象業種となった。そして2018年12月の入管法改正により、2019年4月からは新設の在留資格「特定技能」で介護人材の受け入れが可能となる。

表1 日本で働く外国人介護者の諸類型（高畑作成）

時期	来日経緯	在留資格
2000年代～	身分関係で定住した人びと（日本人の配偶者、日系人等）	日本人の配偶者等、定住、永住
2000年代半ば～	日本語学校／専門学校の留学生（週28時間のアルバイト）	留学
2008年～	経済連携協定による介護福祉士候補者	特定活動
2009年～	新日系フィリピン人（2009年の改正国籍法施行により日本国籍となった元婚外子、その母親）	日本人の配偶者等、定住、永住、日本国籍
2012年～	経済連携協定による介護福祉士資格取得者	特定活動
2017年9月～	介護福祉士（専門学校卒業／EPAで来日→介護福祉士試験合格）	介護
2017年11月～	技能実習生	技能実習
2019年4月～	介護労働者	特定技能

このように、日本全体でみれば外国人介護者は着々と増えているのだが、徳之島においてはこのトレンドは見られない。その原因について、以下に詳しくみていこう。

Ⅲ. 徳之島で暮らすフィリピン人

1. 外国人の流動性の低さ、フィリピン人比率の高さ

近年の徳之島における外国人の人口動態の特徴が、流動性の低さである。田島（2000）によると、1990年代に大島郡（徳之島にある3町を含む）でフィリピン人人口が増加したとある。しかし、2012年から2017年にかけての徳之島3町のフィリピン人数の推移¹⁾をみると、ほぼ横ばいであり、その増減は数名にとどまっている（図1）。全国的にフィリピン人人口は増加傾向にある（2012年に20万2,985人→2017年に26万553人、在留外国人統計）が、徳之島においては増減がほとんどない。ということは、技能実習生の受け入れや日本語学校の設立といった、外国人が増える産業的要因が2000年代以降にあまりなかったのであろう。

このことは、徳之島3町に限らず、日本の過疎地において共通してみられる傾向である。表2は、自治体の外国人人口に占めるフィリピン人比率の上位16自治体を示したものである。ここから、①比較的小規模な自治体（町・村）でフィリピン人比率が高いこと、②上位16位に入る自治体には離島が多く含まれること、③徳之島3町は常に上位16町に入っ

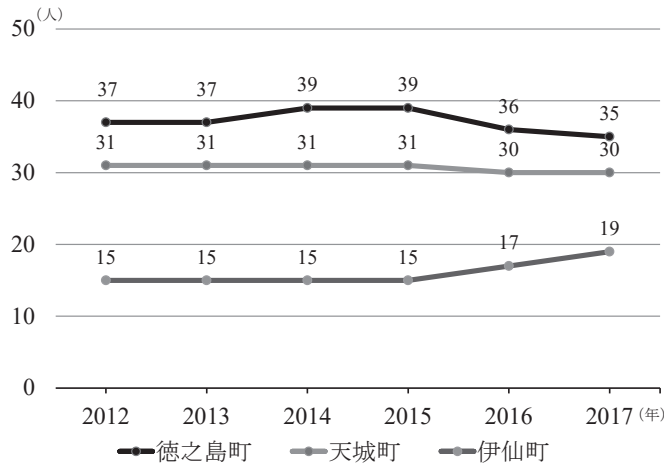


図1 徳之島3町（徳之島町，天城町，伊仙町）のフィリピン人数推移（2012-2017年）

資料：在留外国人統計から作成。

表2 自治体の外国人人口に占めるフィリピン人比率上位16位（2013年，2015年，2017年）

順位	2013年				2015年				2017年			
	市町村名	外国人総数	うちフィリピン人	フィリピン人比率	市町村名	外国人総数	うちフィリピン人	フィリピン人比率	市町村名	外国人総数	うちフィリピン人	フィリピン人比率
1	青ヶ島村	2	2	100.0%	葛尾村	6	6	100.0%	上北山村	1	1	100.0%
2	天城町	35	31	88.6%	青ヶ島村	1	1	100.0%	上関町	2	2	100.0%
3	上小阿仁村	22	19	86.4%	栗島浦村	2	2	100.0%	球磨村	1	1	100.0%
4	美郷町	14	12	85.7%	天城町	34	30	88.2%	上小阿仁村	20	18	90.0%
5	多良間村	20	17	85.0%	多良間村	17	15	88.2%	田野畑村	26	23	88.5%
6	伊平屋村	13	11	84.6%	上小阿仁村	22	19	86.4%	天城町	34	30	88.2%
7	喜界町	44	37	84.1%	喜界町	39	33	84.6%	多良間村	17	15	88.2%
8	葛尾村	6	5	83.3%	田野畑村	16	13	81.3%	葛尾村	8	7	87.5%
9	椎葉村	5	4	80.0%	知名町	56	45	80.4%	伊仙町	22	19	86.4%
10	北大東村	5	4	80.0%	京極町	10	8	80.0%	喜界町	43	36	83.7%
11	上関町	4	3	75.0%	椎葉村	5	4	80.0%	白糠町	55	46	83.6%
12	知名町	64	48	75.0%	徳之島町	46	36	78.3%	椎葉村	6	5	83.3%
13	南大東村	19	14	73.7%	伊仙町	22	17	77.3%	置戸町	5	4	80.0%
14	徳之島町	51	37	72.5%	美郷町	13	10	76.9%	伊平屋村	14	11	78.6%
15	浜中町	36	26	72.2%	伊平屋村	13	10	76.9%	臼杵市	353	273	77.3%
16	伊仙町	21	15	71.4%	北大東村	4	3	75.0%	徳之島町	46	35	76.1%

資料：在留外国人統計から作成。

表3 2018年調査の対象者

初来日	仮名	性別	生年	現職	初来日の理由	同居家族	国内別居家族	介護経験
1980年代	D	女性	60年代	なし	興行労働	子ども, 孫	子ども, 孫	家族として
	N	女性	70年代	なし	興行労働	夫	子ども, 孫	家族として
1990年代前半	B	女性	60年代	介護	興行労働	子ども		仕事として
	I	女性	60年代	なし	結婚	夫, 子ども	子ども	なし
	K	女性	70年代	介護	結婚	夫	子ども	仕事として
	M	女性	60年代	製造	興行労働	夫, 子ども	子ども	なし
1990年代後半	H	女性	70年代	なし	興行労働	子ども	子ども	仕事として
	J	女性	60年代	サービス	興行労働	夫, 子ども	子ども	なし
	L	女性	70年代	サービス	興行労働	夫		仕事として
2000年代前半	F	女性	80年代	サービス	興行労働	夫, 子ども		仕事として
2000年代後半	A	女性	80年代	サービス	興行労働	夫, 子ども		なし
	G	女性	80年代	サービス	親族訪問	夫, 子ども, 実母	きょうだい5人, 姑, 舅	なし
2010年代	C	女性	80年代	サービス	結婚	夫		なし
	E	男性	90年代	建設	仕事(興行以外)	なし		なし

ていること、④上位16位に入る自治体は徳之島3町と同様にフィリピン人人口に大きな変動はないことがわかる。従って、これら自治体では、もともと外国人人口が少なかったところ、ある時点で来住したフィリピン人が定住し続けており、それはおそらく結婚移民だろうという推測が成り立つ。

2. 連鎖移動

次に、高畑(2016)で指摘した、離島で暮らすフィリピン人の来住経緯と連鎖移動についてみていく。表3は、2018年8月に徳之島在住のフィリピン人14人を対象に行った質問紙調査の調査対象者一覧である。2017年末時点で、徳之島3町に暮らすフィリピン人が合計84人なので(表2)、回答者14人は島在住者の16%となる。時間の制約がある中で行った機縁法の調査のためサンプルに偏りがあるが、ひとつの参考にはなるだろう。

表3では、対象者14人を来日時期に従って並べた。対象者14人のうち女性は13人で男性は1人のみである。女性はすべて結婚移民で、男性1人(仮名E)は日本人父とフィリピン人母から生まれ日本国籍を持ち、縁者をたどって徳之島に来たということだった。女性13人のうち9人は興行労働を経て日本人男性と結婚し定住した経緯を持つ。日本で興行ビザの発給基準が厳格化されフィリピン人女性の興行労働者の来日が激減するのが2006年なので、2000年代後半に興行労働者として初来日したという仮名Aは、フィリピン人女性の興行労働ブームの最後の世代である。表の仮名DからAまでの11名は、いわ

ば興行労働または結婚を機に来住した在日フィリピン人女性の第一世代であり、先島諸島でのフィリピン人結婚移民のみならず、全国的にみても、その来住経緯と平均年齢（2018年時点で50歳前後がボリュームゾーン）とが合致する。

連鎖移動についてはどうだろうか。2000年代後半以降に来日した仮名G、C、Eは、回答者のなかでは若い世代である。そして彼（女）らは親や親族がすでに徳之島にいて呼び寄せられ定住したという連鎖移動の背景を持つ。仮名Gは、実母が徳之島で結婚移民となっていた。Gはフィリピンで育ったがハイスクール卒業後（17歳頃）に母に呼び寄せられて来島し（当時の在留資格は親族訪問の短期滞在）、その後、島の男性を紹介されて結婚して定住した。Gは現在、夫と子どもと実母と同居しているが、島内にはGのきょうだい5人暮らしている²⁾。また、仮名Cは島の男性に嫁いでいた姉の紹介で島の男性と結婚して来住した。男性の仮名Eは先述のとおりである。

徳之島3町の全体的な特徴として、島内にある高等教育機関が限られるため「若者が島の外に出る」現象があり、町の人口ピラミッドは砂時計型（10代後半から20代が極端に少ない）である。表3に挙げた調査対象者のプロフィールで「国内別居家族」とは日本国内（徳之島島内を含む）にいるが別居している家族という意味だが、これについてももう少し詳しくみていこう。仮名Dは子どもが島内の自宅外および福岡市に、孫が島内の自宅外にいる。仮名Hおよび仮名Kは子どもが鹿児島市に、仮名Mは子どもが大阪と長崎に、孫が大阪にいる。また、仮名Nは子ども2人が鹿児島市、子ども1人が京都にいるという。子どもや孫がフィリピンを含む海外に留学・移住しているというケースはなかったため、彼女らの徳之島来住後の暮らしは、フィリピンとの往来が顕著にみられるわけではなく、徳之島によくある家庭のありかたとほぼ同一だったと推測される。

3. 職業

調査対象者14人の現職は、男性である仮名Eは建設だが、女性の有職者は介護または製造業、あるいはサービス業である。ここでいう製造業は食品加工（総菜づくり）で、サービス業にはスナック経営、スナック勤務、旅行関連業等が含まれる。ただし、兼業農家の場合は、農業と両立できる範囲でのパート労働であることが多い。

現職として介護に従事する回答者は2人だったが、これまでの介護経験を見ると、家族介護（舅・姑など）の経験者が2人、仕事としての介護経験者が5人の合計9人にのぼる。家族介護の経験者は1980年代に来住した、徳之島におけるフィリピン人結婚移民の先駆者たちである。40代後半から50代となり、すでに孫がいる。日本で介護保険が導入されるのが2000年代である。彼女らが興行労働を経て定住したのが1990年代とすれば、当時はまだ家族による在宅介護が一般的だったのだろう。続く1990年代前半以降に初来日し

た世代は、仕事として介護に従事したことがあるという人が多い。後述するように2010年に徳之島で初めてのホームヘルパー2級講座³⁾が行われるのだが、このときに介護という新しい仕事に挑戦しようとした人びとであろう。次に、介護に従事するフィリピン人女性について詳しくみていく。

IV. 徳之島におけるフィリピン人の介護職への従事

1. 2010年の介護研修

徳之島で介護職に従事するフィリピン人女性が増えた原因のひとつが、2010年に行われたホームヘルパー2級講座である。『南日本新聞』（2010年5月26日）は以下のように報じている（下線は引用者による）⁴⁾。

徳之島のフィリピン人女性7人、ヘルパー2級に挑戦

徳之島に住むフィリピン人女性7人がホームヘルパー2級の資格取得に挑んでいる。専門用語や漢字に苦労しながらも助け合い、30日の修了式に向け介護実習を続ける。実習先のグループホームへの就職が決まった人もおり「介護の仕事が好き。本当にうれしい」と喜んでいる。

7人は、徳之島町亀津のケアハウス徳之島で養成講座に通う。講座をチラシで知った近くの主婦、Pさん（40）が「日本人と同じように資格に挑戦できる」と周囲の同郷人に声を掛け、集団受講となった。

講座は、福祉制度に関する座学から、介護実習まで約3カ月。テキストには、専門用語や難しい漢字があり、仲間同士で平仮名にしたり、辞書を調べて英訳したりと、授業後も深夜まで復習した。講師陣もルビをふったり英訳を手伝った。

フィリピンで介護の勉強をしていたQさん（49）＝同町亀津＝は、実習先のグループホーム「たんぼぼの家」で、6月から正職員として働く。「お年寄りたちは、亡くなった祖国の父母のようで、話しをすると幸せな気持ちになる」と声を弾ませた。

天城町のグループホームにパート職員として採用されたRさん（39）＝天城町平土野＝は「日本の家族のために、資格を取って働きたかった。挑戦してよかった」と喜んだ。

これは新聞記者が書いた記事なので、彼女らのコメントのどの部分を切り取り記事にするかは主観的な選択によるものである。それにしても、引用されるフィリピン人女性たちの「日本人と同じように資格を」「（施設に入居する）お年寄りは祖国の父母のよう」「日本の家族のために資格をとりたいたい」の3つは、筆者らが2008年に行った在日フィリピン人介護者調査で自由回答欄に記されたコメントとほぼ合致する（詳細は高畑2019を参照）。

コメントの話し手が、現在の在日フィリピン人の最多年齢層である40～50代であることから、この世代に属し、日本で暮らすフィリピン人女性たちに共通するライフコースや生活構造があることがうかがわれる。

この講座を知り、周囲のフィリピン人女性たちに参加を呼び掛けたというPさんによると、当初、介護講座を担うS先生（鹿児島市在住の日本人女性）から電話が来て「介護の免許をとらないか」と誘われた。「漢字が読めないから無理です」と返事をしたところ、「教えてあげるから心配ないよ」と言われた。最初に会ったときに、講座のテキストを見せられた。それを見て「もう無理無理、字を読めないから」と言ったが先生から「大丈夫、任せて」といわれた。このように日本人女性の講師からの強い勧めでPさんを含む一期生7人が受講し、その成果を見て二期生としてさらに多くのフィリピン人女性を受講した。

S先生は日本語のテキストを英語に翻訳し、日本語のテキストにはルビをふってくれた。また、テストは日本語と英語を併記し、復習用の問題集を日本語と英語で先生が作ってくれた。Pさんは日本語の読み書きができないため、そもそも日本語の本を読んだことがない。しかし介護の講座テキストはS先生によるサポートのおかげで読むことができて内容がよくわかったし、その後もテキストを大事に保存している（2018年8月5日、徳之島にてインタビュー）。

2. 介護職に就く女性の事例

ここで、現職として介護に従事するフィリピン人女性たち合計5人の状況を紹介する。彼女らは2016年8月に行った現地調査においてインタビューすることができた人たちで、年齢や在日年数等は当時の情報である⁵⁾。

・現職が介護

Tさん（45歳、在日24年、興行労働者→結婚移民）。興行労働者として数回の来日および就労の経験を経て、島の男性と結婚した（その後、離婚）。子どもは3人いる。母子家庭で自分が生計の担い手だったため、子どもたちに学費がかかる頃はフィリピンパブに勤務していた。しかし、お酒は身体に悪いと思い、昼間に仕事ができる介護へ転職しようと研修を受けた。実習先でそのまま就職することになり1年働き、その後別の施設に移って取材時まで働いていた。実家に仕送りをしなければならず、介護の仕事だけでは収入が足りないので夜勤明け等に別のアルバイトをしている。

Uさん（47歳、在日18年、興行労働者→結婚移民）。興行労働を経て島の男性（農家）と結婚して定住した。子どもは2人おり成人している。普段は夫の実家の農業を手伝いながら介護施設でも働いている。2010年に介護研修を受けたときは姑が自宅にいて介護が必要な状態であった。従って、Uさんの場合、講座を受けるさいの当初の目的は姑の介護

であった。その後、姑は施設に入所したためUさんは2012年から仕事として介護施設で勤務するようになり、取材当時も勤務を続けていた。介護の仕事をするようになって厚生年金に入れるようになり、自分の老後についても考えるようになった。「フィリピン人にとって厚生年金に入れることは意味がある」と話す。

Vさん（56歳、在日32年、興行労働者→結婚移民）。1980年代後半に歌手として各国で働き、その後、島の男性（自営業）と結婚して定住した。子どもは3人おり、そのうちの何人かはすでに成人している。島に来住した当初はフィリピンパブがまだ多くあったため、そこで働く出稼ぎの女性たちを対象に服飾販売を行い、その後パブを経営した。店の従業員から勧められてホームヘルパー2級講座を受講した。しばらくは、昼間は介護、夜はパブ経営とダブルワークをしていたが、2011年から介護職を専業としている。

以上から明らかになるのは、①2010年に行われたホームヘルパー2級講座が、彼女らが介護職へ向かう「入口」となっていたこと、②受講の目的は家族介護と仕事としての介護の両方があったこと、③兼業農家を含め、彼女らにとって仕事を掛け持ちすることはよくあること、の3点を指摘できる。次に、介護から離職（転職）した人びとについてもみていく。

・介護から離職

Wさん（55歳、在日16年、結婚移民）。島に嫁いでいた妹の紹介で島の男性と結婚して定住した。介護の資格取得直後、2010年6月から介護施設で2年働くが、日本人のスタッフたちから低く見られ、怒りの気持ちも湧いてきて辞めた。日本人スタッフに、「あなたが他の施設に行っても、働かせてくれるところないよ」と言われた。別の施設に移り、平日の昼間のシフトで働き、土日は空き時間となったので別の施設で働いた。腰を痛め、介護の仕事を辞めた。労災の仕組みを知らず、病院で「仕事で（腰を）痛めた」と言わなかったことが原因で、労災がおりなかった。「労災について外国人にもわかるように説明してほしい」とWさんは言う。腰が少し良くなったらまた介護の仕事をしたい。

Xさん（42歳、在日20年、結婚移民）。最初は楽しかった。しかし施設の利用者さんに過度に感情移入してしまった。同じ町に住む日本人の利用者さんで、認知症があり、子どもは1人しかいないので寂しいという。その人を気の毒に思い「心を奪われてしまった」。そのことで、ケアマネジャーから文句を言われ、嫌な気持ちになった。この経験から、あとで傷つくだけなので利用者さんに愛情を注いではいけないと感じている。

以上2人は離職者のケースだが、日本人職員からの差別、仕事のきつさによる労働災害、利用者との心理的距離等、いずれも筆者が2008年に実施した在日フィリピン人介護者調査で得られた離職理由とよく似ている。これらは外国人が介護職につくさいに普遍的に起こる課題と言えるだろう。

V. むすび

最後に、冒頭で挙げた3つの問いに対する知見を整理しておく。第一に、徳之島におけるフィリピン人の人口動態的特徴は、興行労働を機に島の男性と結婚し定住した女性の多さと流動性の低さである。1990年代に増加したフィリピン人女性の結婚移民がそのまま定住し加齢を続けている。調査対象となった女性たちの多くがこの世代にあたる。

第二に、彼女らが介護職に従事する理由は、2010年に行われたホームヘルパー2級講座を契機として彼女らの間に介護という仕事が選択肢として定着したこと、仕事のやりがい、そして実利的な側面もあるだろう。2016年および2018年の調査対象者にホワイトカラー職は皆無である。島内でフィリピン女性たちがつく仕事は農作業、調理や清掃、観光関連産業などの、いずれもブルーカラーの非正規労働（日雇い・アルバイト）であることが多い。そのなかで、介護職においては、夜勤をすれば経済的自立が可能な賃金水準で、さらには社会保険と年金をかけることもできるというメリットがある。大規模な工場が少ない徳之島において、フィリピン人女性たちにとっての数少ない職業の選択肢のひとつが介護なのである。筆者らが2008年に行った在日フィリピン人介護者調査（回答者の多くが離島・過疎地以外に居住）では「やりがい」や「社会的地位の獲得」が入職動機として挙げられたが、離島に居住しすでに就業から数年を経た本調査（2016年・2018年）の対象者たちには、介護職をめぐる現実的側面（良い面も悪い面も）がすでに見えており、その上で介護を継続しているように思われる。

第三に、徳之島の事例から見える「離島の結婚移民」に共通する特徴は、「特定の時期に來住し流動性が低い女性たちの定住と家族形成、紹介婚による家族・親族の呼び寄せ、加齢・高齢化の物語」である。高畑（2016）で言及した、先島諸島のA島における紹介婚によるフィリピン人女性の連鎖移動ほどの規模ではないにせよ、徳之島においても先に嫁いだ妹が近隣の日本人男性に姉を紹介して嫁がせたり、島の男性と結婚（再婚）した女性が後に前夫との間に生まれた子どもたちを呼び寄せた上、娘を島の男性に嫁がせる等、さまざまな形で連鎖移動が行われた。去る人は去って残る人が残った結果が、2012年以降に維持されている「島内に約80人」というコミュニティなのである。

田島（2000）は、1990年に行われた天城町とシライ市との姉妹都市交流など「離島の国際交流」の目的を「離島の閉鎖性を克服する」と書いていた。それはどのように実現されただろうか。

1980年代後半から1990年代、日本の津々浦々にあるフィリピンパブでフィリピン人の若年女性たちが半年交代で働き、地元の男性たちと親密な関係を築いた。その後、各地で日比家庭が生まれ、離島や過疎地においては紹介婚でさらにフィリピン人女性が來住し、

たとえ部分的・局部的にでも「嫁不足」が解消された。そして彼女たちは次世代を育て、子どもが島外に進学すればその仕送りのために働き、実家の甥姪に学費が必要となれば送金のために働き、介護を含む各種のサービス業で長時間労働をしてきた。さらには、家族として、また仕事として介護に従事することで、島の高齢者たちをケアする役割を引き受けてきた。

天城町とシライ市の姉妹都市交流の象徴である「フィリピン祭り」は1998年を最後に中止となり、当時天城町に作られた公園「フィリピン村」では、フィリピンの伝統的家屋であるバハイ・クボヤ、国を代表する動物カラバオ、製糖作業の様子を示す人物などのコンクリート塊が残るのみである。大企業および行政がアクターとなる姉妹都市交流よりも、外国人女性がこの島に嫁ぐという極めて個人的な理由による人びとの交流が、約30年にわたって実質的にこの島の「閉鎖性」を破ってきたように筆者には思えるのである。

注

- 1) インターネット上で全国の市町村別国籍（上位6か国）別外国人人口が明らかになるのが2012年以降であるため、この期間でのみ比較が可能となった。
- 2) ただし、ここでいう「きょうだい」がGと両親を同じくするきょうだいなのか、異父兄弟あるいは異母兄弟なのかは不明である。
- 3) これは2010年当時の呼称である。2013年以降、同様の資格は「介護職員初任者研修」を呼ばれており、修了までの講義・演習・実習の時間数等が旧制度（ホームヘルパー2級）よりも増えている。
- 4) 2016年度に本共同研究を始めた当初、共同研究者で徳之島在住のフィリピン人と面識がある者は皆無であった。インターネットでこの記事を見つけたことを契機に現地調査が可能となった。なお、記事中で人物は実名である。講座は2010年5月に始まり第二期まで続くが、その後は下火となった。そもそも徳之島に住むフィリピン人数は限られるため（図1によると2012年時点で83人なので2010年時点でも80人前後と思われる）、そのなかで講座を受けようという意志があり受講料を支払うことができ、さらには基礎的な日本語能力を身に着けた人材が払底したためと推測される。
- 5) 本共同研究では2016年と2018年のいずれも8月に現地調査を行った。2回の調査で同一人物にインタビューあるいは質問紙調査をしたわけではないため、上記の表3に列挙した14人（2018年調査）とインタビュー対象者（2016年調査）とは合致しない。

文献

高畑 幸（2016）「沖縄・先島諸島のフィリピン人女性たち——島の結婚移民として——」

『移民研究』11: 37-54.

高畑 幸 (2018) 「介護の専門職化と外国人労働者——日系人から結婚移民, 介護福祉士まで」 駒井洋監修, 津崎克彦編著『産業構造の変化と外国人労働者』, 66-82.

高畑 幸 (2019 近刊) 「在日フィリピン人と介護労働——社会的評価獲得の手段として」『比較家族史研究』33号.

田島康弘 (2000) 「大島郡天城町における日比交流について」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』51: 49-71.

(たかはた さち・静岡県立大学国際関係学部教授・社会学)

The Settlement and Job Opportunities of Filipino Marriage Migrants
in Remote Islands, Japan:
Filipinas Who Settled in the 1990's Working as Caregivers

TAKAHATA Sachi

School of International Relations, University of Shizuoka

(sociology)

Key words : Remote islands, Marriage migrants, Filipinos, Caregivers